

2008年度の「大学史」リレー講義について

佃 隆一郎

〈大学史事務室〉

本愛知大学では2006年度よりまず名古屋（三好）校舎で始まり、翌07年度より豊橋校舎でも開設された「大学史」リレー講義（半期ずつ。春学期一前期一は豊橋、秋学期一後期一は名古屋で開講）は、試行を重ねつつ現在、4年目の春学期試験を終えたところである（2009年7月末記）。

この『愛知大学史研究』では2007年の創刊号より同講義について、各担当者による各講義の報告や関連シンポジウムの記録とともに、全講義に出席している“実質コーディネーター”としての私による講義全体の報告を掲載していることから、今回も前年度、すなわち2008年度の「大学史」講義について全体報告をすることにしたい。

2008年度の講義方針

「大学史」リレー講義の責任者である教学担当副学長が、任期の関係で2007年11月より太田明法学部教授に交代して、翌08年1月には同教授によって新たな「2008年度 大学史（講義案）」が作成され、各関係者に配付された。そこでは冒頭に「方針」として、授業の曜日・時間を両校舎とも金曜日4時限目に統一することに続いて、

- ・大学史の一般論は軽めにし、自校史に重点を移す。
- ・(1)愛知大学の設立、(2)本学の前身「東亜同文書院大学」、(3)大学史のなかの愛知大学、(4)愛知大学の重大事件、(5)愛知大学の現状、という順序で配列し、中間にキャンパスツアー

を行う（名古屋校舎からは木曜日にバスツアーを予定）。

〔中 略〕

- ・現役で活躍する同窓生の講演を入れる（できれば毎年替えたい）。
- ・「設立趣意書」の解説を1回分設ける（武田〔信照〕前学長の提案）。

という、新たな試みが複数盛り込まれた（〔 〕内は今回の補注）。

これら引用項目の2点目にある「〔豊橋校舎への〕バスツアー」については、初年度は実施できなかったものの2年度目（すなわちこの方針が策定された年度）に実現し、参加学生からは概ね好意的に受けとめられたものである（詳細は本誌第2号の拙稿「愛知大学キャンパスツアー」参照）。また、4点目にある「設立趣意書」は、本学設立にあたって当時の文部省に1946（昭和21）年8月1日提出された『愛知大学設立認可申請』の冒頭に掲げられた、新大学の理念と方針を明記した文章である（本講義のテキストにしている『愛知大学小史』、同史編集会議編、梓出版社刊、2006年、の12ページに全文を掲載しているほか、豊橋校舎内の大学記念館入口などにも掲げられている）。

2008年度の講義内容

以上のように策定、了承された新方針のもと、固められた2008年度「大学史」講義（秋学期の名古屋校舎では「総合科目1」として設定）のス

ケジュールと各担当者（敬称略。肩書はシラバス公開時）は以下の通りである。

【春学期（対象……文・経済・国際コミュニケーション学部、短期大学部各1・2年生）】

1. はじめに：太田明（教学担当）副学長・佃隆一郎
2. 愛知大学創設の経緯と理念：大島隆雄・佃
3. 本学の前身「東亜同文書院」の歩み(1)：小崎昌業・佃
4. 愛知大学キャンパス案内：佃
5. 本学の前身「東亜同文書院」の歩み(2)：藤田佳久
6. 大学の起源と展開(1)：北嶋繁雄・佃
7. 愛知大学での学生生活(1)：つボイノリオ・佃
8. 大学の起源と展開(2)：河野眞
9. 大学の起源と展開(3)：田子健
10. 「愛大事件」とは何か：豊島忠・佃
11. 愛知大学での学生生活(2)：松浦元男・佃
12. 薬師岳での山岳部遭難事故：山田義郎・佃
13. 大学紛争と大学改革：武田信照前学長
14. 愛知大学の現在と将来：

佐藤元彦（経営担当）副学長

15. 試験（筆記）

【秋学期（対象……法・経営・現代中国学部各1～3年生）】

1. はじめに：太田副学長・佃
2. 愛知大学創設の経緯：今泉潤太郎・佃
3. 愛知大学創設の理念：大島・佃
4. 大学の起源と展開(1)：北嶋・佃
5. 大学の起源と展開(2)：河野
6. 大学の起源と展開(3)：田子
7. 愛知大学キャンパスツアー：佃
8. 本学の前身「東亜同文書院」の歩み(1)：小崎・佃
9. 本学の前身「東亜同文書院」の歩み(2)：藤田
10. 愛知大学での学生生活：つボイ・佃
11. 「愛大事件」とは何か：豊島・佃

12. 薬師岳での山岳部遭難事故：山田・佃
13. 大学紛争と大学改革：武田前学長
14. 愛知大学の現在と将来：佐藤副学長
15. 試験（筆記）

このように、2008年度の第一の“目玉”として取り入れた「現役で活躍する同窓生の講演」（シラバスでの表現）は、ラジオ番組などで人気のパーソナリティーであるつボイノリオ氏（本名：坪井令夫。1972年名古屋一現車道一校舎法経学部経営学科卒）と、独自の経営手法や製品開発が各方面より注目を集めている(株)樹研工業取締役社長・松浦元男氏（1960年豊橋校舎法経学部経済学科卒）を招聘でき、つボイ氏には春・秋両学期、松浦氏には春学期での講演をしていただくことになった（連絡・交渉には私は直接関係する立場ではなかったが、快諾して下さった両氏及び、資料提供等のご協力下さった方を含む関係各氏には、この場を借りて感謝申し上げる）。

ほかのリレー講義での新規担当者は、学長代行をへて2008年8月学長に就任することになる佐藤経済学部教授と、東亜同文書院大学記念センター長の藤田文学部教授であり、佐藤氏にはいよいよ正式発表となった“名古屋校舎の笹島移転”を含めた本学の現況を、藤田氏には東亜同文書院が毎年実施していた「中国調査大旅行」をそれぞれ取り上げていただくことになった。また、「設立趣意書」の解説については、大島名誉教授の担当回のメインに据えられた。

なお、春学期と秋学期で講義の順序が少し異なっているのは、春のキャンパス案内（自校舎でのものになるため「ツアー」でなく「案内」と呼称）を大型連休のはざ間にあてることで、受講生を呼びとめることを意図したことと、併せて東亜同文書院についての2回分をそのあとに移したことによるためである。また、秋のバスツアーのみ前年度より木曜日に実施しているが、これは木曜午後には原則として講義がないため、受講生が他講義と重ならない形で参加できるよう考慮したためである。

講義の実際の進行と、今後の課題

こうしてマイナーチェンジを施したうえで、まず豊橋校舎で始まった2008年度「大学史」講義であるが、受講者数の面で両校舎に隔たりが生じるようになった。すなわち、豊橋では2年生も履修できるようになったことによってか、約150名と前年度の倍近くに増えたが、名古屋では3年生まで履修できるようになったのにもかかわらず、50名を割ってしまうことになった。加えて名古屋校舎の場合そのほとんどが経営学部生となり、(愛大事件や東亜同文書院に関心を持ってもらうことが期待される)法および現代中国学部生が極端に少なかったのは問題であった。

講義がスケジュール通りに行なえたかという点については、春の豊橋で小崎氏(東亜同文書院大学・愛知大学両方の卒業生)の日程の都合上、同氏の回と私のキャンパス案内とを入れ替えることになり、前述した“ゴールデンウィーク特集”としての意味づけはなくなったが、新入生に対してはオリエンテーションとしての役割を(4月に実施したことで)変わらずに果たせたことと思っている。また、河野国際コミュニケーション学部教授の回(「ベルリン大学と日本の大学」)もやはり同氏の都合から、次の田子文学部教授の回(「日本における大学の発展」)と入れ替えとなったが、秋の名古屋校舎については、予定通りの日程で実施できた。

そして、卒業生2氏の「スペシャルゲストご講演」と銘打った講義であるが、つボイ氏は“愛知大学生の頃の、時代状況もあつての偶然が、今の自分の地位をつくることになった。皆さんも時代の変化に敏感になりつつ、チャンスを実にものにしたい”との、また松浦氏は“結果はあとからついてくるもの。卒業後にもつながる学生生活を送ってほしい”との旨などの、“後輩へのアドバイスおよびメッセージ”をいずれも熱意をこめて語って下さった。ただし、学期の中盤過ぎという時期的なことであつてか、実際の出席者が予

想より少なかったことは、両氏に対して申しわけなかったところであり、今後は公開講義の形にするべきかもしれない(少なくとも「あの卒業生〇〇氏来たる」というような宣伝チラシを作製し、掲示して履修者以外の学生にも来室を呼びかけるべきであろう)。もっとも、出席した学生の間では、学期末のアンケートで「おもしろかった」「大物が来てくれてうれしかった」といった、(具体的なものではないが)両氏の講演に対する感想を記した者も目についたことを述べておきたい。

この“学期末アンケート”は各講義とも実施が義務づけられているものであるが、それとは別に本講義では初年度より、私も担当している最初の回に、私の意向により独自のアンケート作文を書かせている。テーマは校舎や学年によって少し分けているが、全体の骨子は「愛知大学に入学し、学んでいる」ことについての所感としている。とりわけ春学期の1年生には、“受験の結果この大学に入った”ことへの不安感を正直に述べているものが多く、「大学史」講義が各大学で行なわれるようになった目的の1つである“「不本意入学者」(東大ほかで教授を務めた寺崎昌男氏による定義)に自分の居場所を見つけさせる”ことになげさせたいところである。このアンケートで見られた回答の具体的な紹介はまたの機会に譲りたいが、ここでは2008年度秋学期の第2回講義の前に、太田副学長の意向によってさらに実施したアンケート「開講科目の紹介に示した各回について、あるいは“大学史”全体を通して、受講者として知りたい事柄は何か」への回答一覧を別掲することにする。

太田氏が出題した筆記試験の問題(1題のみ。持込不可)は、四十数年前の本学の宣伝文を資料として挙げて、それを参考に“現在の愛知大学の宣伝文”を書かせるというものであり、各受講生にとって将来“愛知大学を卒業した”ことを説明する時が訪れた際、この経験はきっと役に立つことであろう。しかし太田氏は、(教学担当から経営担当に移ったあと)2008年度後半に副学長を

大学史講義アンケート

『開講科目の紹介』に示した各回について、あるいは“大学史”全体を通して、
受講者として知りたい事柄は何か」（2008.9.26、名古屋校舎で実施）全回答一覧

学部・学年	内 容（ほぼ原文のまま）
経営学部1年 (順不同、 以下同)	せっかく、自分のいる大学だから、もっと愛大を知っておこうと思い、当講義をとったので愛大史について知れば、と思う。しかし、愛大史を細かく覚えることが中心な授業に期待するのではなく、愛大の各歴史を事柄を、外部から見て、理論的に、理解しながら学んでいきたい。その中に、生々しい人間ドラマや、講義者しか知らないエピソードをまじえながら、話してもらえれば、と思う。
	愛知大学は歴史のある大学ですし、自分の通う大学なので、この授業を通して、大学の歴史などを知り、覚えていこうと思います。
	愛知大学の歴史について少し知りたいと思った。キャンパスツアーは行ってみたいと思いました。名古屋キャンパスとの違いを発見したい。
	豊橋キャンパスと名古屋キャンパスの違いを見たい。
	東亜同文書院のあった所は、今どうなっているんですか？ なにか建物とかあるんですか？
	愛大のできた経緯。
	有名人はどんな人がいるか知りたい。
	どうして愛大は中国と関係しているのか？
	愛知大学OBのハト派とタカ派の抗争について。愛大キャンパス移転を猛反対している人たちは、どんな人たちか。
	学部生と予科生とのちがひ。
	入学式の校歌は、いつの時代に、どのような状況でつくられたのか。
	今まで起こった大きな事件について。
	どうして名古屋キャンパスなのに、三好にあるんですか？
	愛知大学事件と葉師岳での山岳部遭難事故。
	もう少しためになる事を教えて下さい。
	愛知大学にはなぜ理系の学部がないのか？
	関東地方、主に首都圏での愛大の認知度。
	ヨーロッパの大学のスタイルと日本の大学のスタイルでは何か違う点はあるのだろうか。
現代中国学部 1年	東亜同文書院時代、大旅行がありましたが、その時の話をくわしく知りたい。
経営学部2年	ツアーに行ってもいつも通っている大学を違った視点で見ているという普段見つけられないような大学の歴史を知りたいです。ところで一番のポイントはどこですか？
	一度だけ豊橋キャンパスに行ったことがあるのですが、名古屋キャンパスとは広さやサークル会館などの規模がこんなにも違うのはなぜですか？
経営学部3年	大学史の中では特に、開学してからどのような形で発展していき、今に至るかについて詳しく知りたいと思う。
	愛知大学はどのように変化していったのか。
	愛知大学がどのように発展していったか。

辞任し、愛知大学自体もこの年度末で退職して他大学に転任されたことで、「大学史」講義の責任者としては1年限りのものとなったが（ほかにも田子氏が転任し、武田氏が定年退職）、2009年度は功刀由紀子現副学長のもと、「大学史」講義は豊橋校舎でさらに増えた受講生を迎え、また構成を新たにして進められている。秋学期の名古屋での受講者数の増加に期待したい。

〔付記〕堀彰三・太田明両教授により遺されたもの

本稿の対象時期である2008年度には担当者に入っていないが、前年度の春学期（2007年7月）に経営担当副学長として「大学史」講義の第13回「経営体としての愛知大学」を担当された堀彰三経営学部教授が、その後第15代学長就任、辞任をへて2008年7月に他界されたことにも、ここでふれておかなければならないと思う。

この年から豊橋校舎でも始まった「大学史」の新たな試みの一環であった堀氏の講義は、愛知大学が他の私立大学とは少し違った独特な経営形態をとっていて、昨今の大学全体が直面している諸問題に本学なりに対処していることを体系的に学生に教示するものであった。創設期の労苦や愛大事件、さらには薬師岳遭難事故といったテーマに比べ、堀氏が担当した分野は地味なもの映ったかもしれないが、最後に“個人経営でない特別な私大であることを誇りに思っている”と話を結んだのは、少なくとも私にとって印象的であった。しかし、同年秋学期での講義計画変更に加えて健康を害されたことで、堀氏の本講義担当はその時が最初で最後になってしまい、(前述したように経営学部生が受講者の大部分を占めている)名古屋校舎で実現を見なかったのがとりわけ残念なところであるが、ならばこそ、わずかな間ながらも堀氏が講義された“大学経営史論”は、今後の「大学史」講義の一つの方向性を示すものとして無駄にしてはなるまい。

また、これはすでに述べたが太田明教授が2009年に他大学に移られたことは、同氏が本講義の多方面において開設初年度から積極的に関与し、関連の論文も複数発表されただけに^(註)、本学での「大学史」講義にとって“痛手”となった点があることは否めない。実は、本講義で責任

者としての役割を果たすことになっている教学担当副学長は、諸事情により毎年交代しているのが現状であり、方針を定めるという面で、「大学史」講義にも確かに影響を与えかねないものがある。しかしそれは、さまざまな可能性を試行する機会が毎年与えられているともいえるはずであるから、太田氏が“最後のご決断”の時まで示された姿勢を継承すべく、未開拓の分野が多く残されているはずの「大学史」講義で、私たちはさらにさまざまな試みを続けなければならない。(堀氏のご冥福と、太田氏の新天地でのご活躍を心よりお祈り申し上げます)

註

太田明氏はまず2006年9月に学内誌『一般教育論集』第31号(一般教育研究室)に「大学史をどう語るか—大学史講義案—」を発表し、同年同月より始まった「大学史」講義では第4回「日本における大学の形成」と第8回「戦後の学制改革」を担当した。続いて2007年には『一般教育論集』第32号に「大学教員の職名・組織変更の大学史的意味—愛知大学の教員組織の整備との関連で—」を発表し、同年度の「大学史」講義は第4回「アメリカにおける近代大学の誕生と展開」を担当している。さらに2008年に、『一般教育論集』第33号に「大学史をどう語るか—大学史講義案—(2)」を発表した(この年の「大学史」担当講義は本文参照)。2006・07年の各講義の内容は、本『愛知大学史研究』創刊号及び第2号で紹介されている。



つボイノリオ氏の講義風景
2008年度秋学期・名古屋校舎でのもの(撮影：筆者)